



☆こどものアトリエに向けて☆

2025. 11. 彩都けいあい

【目 標】 作り上げた喜びや達成感を得て、 園生活をより主体的なものとする

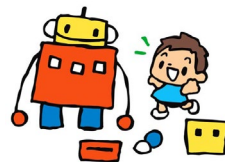
年齢に応じたねらいを大切に、各クラスのテーマに沿って合作板作り（壁面製作）を行っています。

活動を進める中で『どうやって作ろう？』と試行錯誤したり、『出来た！』と達成感を得ることで集中力も高まってきました。少しずつお話の世界が出来上がっていくことに喜びも感じ「先生！次はこれも作りたい」「これ使って作っていい？」と意欲が出ている子ども達です。

ハサミ・のりの扱い方等 技術的な事だけでなく、一人一人の発想を認めながら、自信を持って取り組めるよう関わっていきます。

各クラス、知識やテーマの内容を深めるための体験も刺激となり、思った事や感想など子ども達同士で話す姿もあり、気持ちも盛り上がってきていますので、各学年での様子や大切にしていることをお知らせ致します。

<年少組>



◎ 作る物への意識を持って取り組む（目的意識）

年少組では特に、今 自分が何を作っているのか意識を持てる様、言葉掛けを大切にしています。

又、作る活動だけでなくごっこ遊びや体験遠足を通して、製作活動がより積極的になっていきます。何を作っているのが理解出来ず「もう終わりにする～」「疲れた～」とならないよう、子ども達と沢山の言葉を交わし、共に作るという意識を持てるようにしています。



◎ 自分の力で完成させる喜びを体験する

『危ないから…』『時間が掛かるから…』と、こちらが手助けするのではなく、個々の課題点を把握しながら用具の扱い方や自分で進めていく為の助言をしています。また、作る際にはボンドやのり、はさみの扱い方を一人一人に伝えながら取り組んでいます。少しのコツを伝えることで、子ども達は大きな力を発揮する事が出来ます。経験を重ねることで最後まで諦めず、自分の力で完成させ、達成感を味わっていけるよう進めています。

<年中組>

◎ 様々な材料を使い、材料経験を豊かにする



年少組の時よりも、扱う材料・用具が増えています。素材によってボンド、のりを使い分ける事や、その際にのりの量を考えられるように声を掛けています。何の材料を使ったらよいか尋ねる姿もありますが、子どもが何気なくつぶやいた言葉やアイデアを拾って「それ面白いね！」と沢山認め、多くの材料の中から自分で選り出す喜びを得られるよう働き掛けています。

◎ グループでの共同製作を通し、刺激を受けながら取り組む場を設定する



クラスの友達とアイデアを出し合ったりイメージを共有しながら取り組めるようになってきました。一人の力では難しいことも、皆で作ると違う楽しさがあったり「私はこっちにするから〇〇君こっちして」「一緒にやったら早いから一緒にしよう」と友達と沢山コミュニケーションをとりながら楽しんで作品作りをしています。皆で力を合わせ作り上げたものを見て喜びを味わい、更に向上心も高まっています。

「この部分は私が作った！」と自信を持って話せるよう、丁寧な働きかけをしながらアトリエまで子ども達の気持ちを1つに取り組んでいきます。

<年長組>

◎ 木工や沢山の材料を活かし、自分で材料用具を選ぶ



素材の特性を知り、沢山ある素材から自分の使いたい物を選んで作っています。

この素材を組み合わせてみようかな？と考えたり、ボンドはすぐ乾かないので“そっと置いておく”という事も理解し活動を進めていく様になりました。木工活動も各クラス少しずつ取り入れています。スムーズに木を切ることが出来るようになり、今は金づちに奮闘中です。木の厚さを考えて釘を選び、始めは釘が刺さるまでゆっくりと打つなど、園長先生に教えてもらったコツを実践出来るよう工夫しながら取り組んでいます。

◎ 共通の目的を持ち、友達と協力しあう（役割分担）

年長組では、グループで協力し合い、1つの物を完成させます。友達と意見を出し合い、一緒に進めていく事を楽しめるようになってきました。友達のアイデアに「いいね！」と共感したり「じゃあ次はこうしよう！」と更なるアイデアへとつながっています。又、木工活動では自分が『切りたい！』という思いが最初は強いのですが、**木をしっかり支えてもらうと切りやすい⇒自分もしてあげよう⇒してもらってありがとう**と助け合って出来る喜びを味わっています。



◎ 集中し、丁寧に仕上げる

土台となる部分が出来てくると、次は細かなところを作りあげていきます。

人物の指一本一本まで意識したり、人物や家などミニチュアサイズでの製作にも挑戦します。年長組にしか出来ない『緻密さ』や工夫ある所に注目して、沢山褒めていきます。

少し難しい事や、課題に挑戦していくからこそ、やりがいや出来た時の満足感は大きくなります。上手・下手という視点ではなく、子ども達の心の発想を丁寧に受けとめ、共に感じ合い進めています。